

平成 28 年度第 2 回 小笠原諸島世界自然遺産 地域連絡会議
記録

■日時 平成 28 年 12 月 22 日（木）15：30～17：45

■場所 村役場母島支所／小笠原村役場 A 会議室／B 会議室／環境省関東地方環境事務所

■議事次第

- (1) 管理計画改定作業の検討状況について
- (2) 世界自然遺産の管理に係る地域課題の検討状況について
(新たな外来種対策、愛玩動物対策、オオコウモリ対策)
- (3) 関係機関の主な事業実施状況
- (4) その他
 - ・西之島に係る経緯と今後の対応
 - ・世界遺産センターの運営について
 - ・遺産登録 5 周年記念行事の実施状況

■資料

- 資料 1 管理計画改定作業部会の検討概要
 資料 2-1 新たな外来種への対応状況（外来アリ等）
 資料 2-2 愛玩動物による新たな外来種の侵入・拡散防止に関する地域課題 WG
 検討状況報告
 資料 2-3 オオコウモリの保全に係る事項
 資料 3-1 奥村地区ネズミ一斉防除試行 実施結果概要
 資料 3-2 兄島陸産貝類保全プロジェクトについて
 資料 3-3 南島の生態系回復に係るネズミ対策
 資料 3-4 植生の保全回復に係るノヤギ対策
 資料 3-5 兄島アノールCラインの施工
 資料 3-6 国有林の小笠原諸島固有森林生態系保全・修復事業における今後の実施計
 画
 資料 4-1 西之島の保全に係る経緯と今後の対応について
 資料 4-2 世界遺産センターの運営について（案）
 資料 4-3 遺産登録 5 周年記念行事の実施状況

- 参考資料 1 小笠原諸島世界自然遺産地域連絡会議 設置要綱
 参考資料 2 検討の枠組みの概念図
 参考資料 3 平成 28 年度第 1 回小笠原諸島世界自然遺産地域連絡会議 議事要旨

■協議結果概要

○会議は公開で行われた。

○主な協議内容は以下のとおりであった。

- (1) 管理計画改定作業の検討状況について

【共有事項】

- ・ 科学委員会と地域連絡会議との連携が重要である。
- ・ 地域連絡会議側は有人島に関する記載内容の更新を主体的に行う。

【意見】

- ・ 科学委員会から地域側に期待される役割が大きく、驚いた。地域連絡会議として、考え・方針を出さねばならないという責務を感じた。

- ・ 科学委員会側で、無人島を中心とした 5 年間の振り返りを行い、取組の進捗、結果、課題出しと評価をセットで地域連絡会議に提示いただきたい。
- ・ 管理計画の運用体制を見直しの対象としてほしい。管理計画・アクションプランに書かれていても、運用面で課題があるなど、実現される見込みのない事項が多い。議論の受け皿がない課題も散見されるため、これらを運営上の問題として受けとめ、整理することも、管理計画改定にあたり検討いただきたい。
- ・ 管理計画改定作業部会を母島で開催いただきたい。
- ・ 膨大な資料を読み上げられて意見を求められる方式では、地域側は知恵を出しきれない。会議の運営方法を改善してほしい。

(2) 世界自然遺産の管理に係る地域課題の検討状況について
 <新たな外来種への対応状況>

【意見】

- ・ 南崎のツヤオオズアリ対策は、根絶とは程遠い。既侵入エリアの対処方針と共に、島内拡散の防止や、新たな外来種の侵入未然防止策に特化した議論が必要である。
- ・ ツヤオオズアリ対策は、父島・母島全体で、科学委員の協力も得ながら、全員参加で進めてほしい。
- ・ 新たな外来種に関する情勢が変化中、何の種が危険なのかという評価や、戦略決定は、科学委員会の責任で行っていただきたい。地域では対応できない案件が多すぎる。
- ・ 村のイエシロアリ条例による禁止事項に関する情報発信がこれまでは不十分で、複数の農業者は、農業用資材は規制対象外だったと認識している。改めてはっきりさせてほしい。母島の農業者は苗を勝手に持ち込んでいると言われ、不本意である。
 ⇒次回の新たな外来種に関する地域課題 WG で、条例の扱いや、土付き苗対策を集中的に議論する。(事務局)

<愛玩動物による新たな外来種の侵入・拡散防止に関する地域課題 WG 検討状況報告>

【意見】

- ・ 条例化を見据えた具体的な検討の段階となったので、母島の方にも WG に参加いただきたい。
 ⇒母島側の関係団体は、先の会議で意見の拾い上げがなされなかったために不参加となっていたが、小笠原村より改めて経緯説明と参画依頼を行い、参加の意義を御理解いただいた上でご参加いただきたいと考えている。(事務局)

<オオコウモリの保全に係る事項>

【共有事項】

- ・ 洲崎の餌場創出地区は、モデル地区として、今後も関係者の協力をいただきながら取組を継続し、同様の取組を多地域にも広げていくことを目指す。

【意見】

- ・ 今後 5 年間は、過去の問題整理をくり返すのではなく、課題をクリアするための具体的な話し合いをしていただきたい。

(3) 関係機関の主な事業実施状況
＜奥村地区ネズミー斉防除試行 実施結果概要＞

【共有事項】

- ・ 一斉防除の試行は、技術的改善を図りつつ今後他地域でも実施予定だが、マンパワーと予算面で各機関の協力が必要であり、効率的な実施ができるよう計画検討する。

＜植生の保全回復に係るノヤギ対策＞

【意見】

- ・ ノヤギの捕獲方法については、二隊で挟み撃ちする方法や、イヌを使った追いこみ等、改善を検討してはどうか。

(4) その他

＜西之島に係る経緯と今後の対応＞

【共有事項】

- ・ 村議会から「西之島の早急な立ち入り制限と世界遺産区域の拡張を求める意見書」が出され、保全に向けた担保策が検討されることとなるが、利用制限については、村民の十分な理解を得た上で方針決定を行う。
- ・ 西之島の価値を地域住民に十分理解いただくための情報提供が重要である。

＜世界遺産センターの運営について＞

【意見】

- ・ 地域連絡会議として、母島に世界遺産センターに準ずる外来種対策施設を要望する。
- ・ 母島の生態系を守る重要性が高いことは父島島民も含めた共通認識であるのに、対策施設も、遺産の担当官もいないのはおかしい。

＜遺産登録 5 周年記念行事の実施状況＞

【意見】

- ・ 現地で生態系保全事業に携わる様々な方が参加した普及啓発の取組はよかった。

＜会議運営について＞

【意見】

- ・ 年 2 回開催されている地域連絡会議のうち、1 回は母島で開催してほしい。
- ・ 会議のタイムマネジメントをしっかりと行うべきである。
- ・ 単なる報告なのか、意見交換なのか、説明の意図を明確にし、メリハリをつけた方がよい。
- ・ 科学的な評価だけではなく、地域連絡会議として評価できる内容に関しては、別途

時間を設けてはどうか。

■議事録

○関東地方環境事務所・柴田統括（事務局長代理）より挨拶

- ・ 地域連絡会議の合同事務局である 4 つの行政機関を代表して挨拶を申し上げる。地域連絡会議構成団体の皆様におかれましては、日頃から世界遺産に係る各種取組に尽力いただいております。特に最前線の現場では、過酷な環境の中、延べ数百人、数千人の方が日々汗を流していただいている。直接・間接に事業に係る全ての皆様に心から感謝を申し上げます。遺産登録から 5 周年の節目となる今年も間もなく終わりとなるが、地元を中心に記念イベント等が開催され、また継続されている。母島でも昨夜、大河内科学委員会委員長、織委員による記念講演会が開催され、多くの方々に参加いただいた。より多くの皆様に世界遺産を身近なものに感じていただければと願っている。登録後の 5 年間、それぞれの取組がより地域の側にシフトしてきていると認識している。今年は、遺産の管理計画の改定作業に取り掛かっている。管理計画は遺産に関連して実施されている様々な取組を包括する上位計画であり、その検討は、地域連絡会議が取り組むべき事項のトップに掲げられた重要な事項である。節目の時期にあたる本日の会議は、今後の遺産管理を考える上でも、地域社会の将来にも大きく影響するものと考えている。遺産に係る事業が進む中で、昨年、会議の進行ルールを変え、4 つの行政機関が持ち回りで進行役を担うこととした。今回の会議は、母島に進行役を置いた。会議の進め方に関しても、より地域の声に応える形へシフトしていきたいので、御意見をいただければと思っている。限られた時間ではあるが、幅広い見地から御意見をいただければ幸いである。

○小笠原村・渋谷副村長より挨拶

- ・ 内地出張中の村長に代わり挨拶をさせていただく。本年は、小笠原村にとっては大きな出来事があった。7 月には新しいははじ丸とおがさわら丸が就航し、航海時間が短縮され、大型化、快適化が実現し、島民にも来島者にも喜ばれていると実感している。世界遺産に関して、6 月の内地イベントに始まり、村内においても関係機関・団体の協力いただきながら、様々な普及啓発に取り組んできたところである。また、昨日まで、文化遺産に登録された平泉から町長はじめ視察団が来島され、世界自然遺産を守る取組を御理解いただきながら、今後の交流を図っていくことを約束したところである。小笠原では、遺産登録後 5 年を経過しても未解決の課題、新たに見えてきた課題もあり、それをどのように進めていくかを考える上でも、現在進めている管理計画の改定は重要な機会である。私も座長として、改定に関わらせていただいている。再来年は還選 50 周年ということで、村全体にとって大きな節目を迎える。その意味でも世界自然遺産の価値を永続的に守ると共に、村政確立以來掲げる“自然と共生した島の暮らし”を実現するための取組を推進することがますます重要になると考えている。関係機関・団体の連携のもと、前向きな検討を

進めていきたいと思う。

(1) 管理計画改定作業の検討状況について

○資料1に基づき環境省・尼子より説明を行った。

○説明を受け、以下のような意見及び質疑応答があった。

- ・ 柴田：管理計画の改定に関し、科学委員会でいただいた意見を紹介する。一つは、科学委員会と地域連絡会議との連携が重要だということ。また、役割分担としては、科学委員会側が無人島に関する記載内容の更新について協力するのに対し、地域連絡会議側では有人島に関する記載内容の更新を行うことを期待するという意見があった。
- ・ 渋谷：管理計画改定作業部会の座長として補足する。地域連絡会議のご出席者は管理計画改定作業部会にも出席いただいております、過去の議論は理解いただいているかと思うが、1回目の会議では、計画を理解いただくことと、改定作業の進め方に関する意見交換を行った。2回目は村民生活に身近な項目について議論を試みた。3回目は、項目にこだわらず、有人島、生活に係る部分について、遺産登録後5年間を振り返ってのご意見をうかがった。いただいたご意見をもとに、地域に係る部分の整理はできている。今後各団体への詳細なヒアリングを行っていく。管理計画については地域連絡会議下部の作業部会で検討を進め、たまたま、科学委員会が主体となるアクションプラン改定WGとも合同開催するとの話だったが、科学委員会は主に無人島の生態系に係る部分の改定を同時進行で進め、地域連絡会議にまとめを提示いただくことで、スピードアップを図れると思っている。地域に係る部分については、作業部会がメインとなって検討を行うが、作業部会のメンバーだけではなく、村民にも広く意見を聞いてもらいたいとの意見もあったので、そのような機会も設けながら、作業部会で意見をまとめ、科学委員会の皆様に意見をいただきながら進めていければよいと思っている。改定作業は、来年の7月の地域連絡会議を目途に報告ができるよう、私の方でも務めて参りたい。
- ・ 柴田：スケジュールに関しては、有る程度の目処は付けておく必要があるが、作業の進捗に応じて柔軟に対応していければよいと思う。
- ・ 葉山（小環研）：科学委員会の中で大河内委員長より、“科学委員会は科学的な助言を行うのみで、地域の問題は地域連絡会議で進めてもらう”と言われたが、そうした議論はなかなかみ合っていない。科学委員会から我々に期待される役割が大きく、驚いた。地域連絡会議として、考え・方針を出さねばならないという責務を感じた。
- ・ 堀越（iBo）：科学委員会の方でも、無人島を中心として5年間の振り返りを行っていただき、取組の進捗、結果、課題出しと評価をセットで地域連絡会議に早めに返していただくことで、全体像がわかる。今は、行った事業の一覧表と結果までは提

示いただいているが、その結果を評価するのが科学委員会の役割だと思う。また、管理計画改定作業部会も母島で開催していただきたい。

- ・ 尼子：次回、母島で開催できるよう努める。

(2) 世界自然遺産の管理に係る地域課題の検討状況について

<新たな外来種への対応状況（外来アリ等）>

○資料2-1に基づき環境省・尼子より説明を行った。

○それに対し、以下の質疑応答があった。

- ・ 葉山：防除に携わっている立場から補足する。南崎の15haで行っている防除は、南北の外縁部で対策をして拡散防止をしているが、効果は出ていない状況である。真ん中の13ha以上のエリアでは何も対策ができていない。内部から噴出してくるアリをなんとか抑えられているのかという状況で、根絶とは程遠い。
アジアベッコウマイマイの分布地点として資料に示されている地点は、最初の暫定調査の結果であり、そこから河川沿いに雨のときに流されているようで、河川沿いを海側にも陸側にも拡がっているようだ。初動対応として駆除を実施しているが到底根絶できるとは思えない状況であり、島内拡散の防止をどうするのか、新たに島内に入れたいめにどうするか、入ってしまったエリアをどう防除するのか、議論を始める必要がある。このテーマに特化して議論しないと、母島の陸貝・自然環境は守りきれないと思う。
- ・ 尼子：年明けに開催する新たな外来種に関する地域課題WGで、土付き苗対策について集中的な議論を行う。苗に係る部局の協力を仰ぎたいので、ご参加いただきたい。
- ・ 瀬堀：アジアベッコウマイマイやリクヒモムシは、父島には生息しているのか？
- ・ 尼子：アジアベッコウマイマイは母島のみで確認されている。他のマイマイとは形が異なるので見つけやすい。リクヒモムシは父島や兄島でも生息が確認されている。
- ・ 大河内委員：アジアベッコウマイマイは沖縄に生息しているので、沖縄からストレートに母島に入ったと考えるのが妥当かと思う。同じルートで母島にニューギニアヤリガタリクズムシが侵入するのは時間の問題であり、遺産登録前からそのリスクを訴えているが、いまだに実効的な防除体制が確立されていないのは残念である。
リクヒモムシの発見契機は、1960年代に、父島では固有のフナムシ類がいなくなっているのに母島では残っており、原因を探るためにヒモムシを調査したところ、これが原因らしいということになった。私が初めて母島を訪れたときには既に母島にも分布していたが、リクヒモムシも急速に蔓延してきているのではないかと思う。フナムシは、海から陸上への進化の過程が見られる点で、世界遺産の価値として認められたものの一つだが、乳房山では見られなくなった。石門でも減少傾向が見ら

れ、危機的状況である。やはりヒモムシが影響しているのではないかということで、原因を調査中である。

- 堀越：新たな外来種対策は、今年度は地域連絡会議の下部の部会で議論がなされている。科学委員会下部WGは、今年度は休止されている。侵入経路が増えたり、新たに見つかったものがあつたりと、新しい情報が続々と入ってくる状況で、地域連絡会議で現場対応を考えるとされているが、世界レベルの対応は、地域レベルでは考えられない。専門家にも同席いただくという話もあるが、そのレベルで済む話ではない。戦略が決まっていれば、現場で誰が何をするかという話は地域で考えられるが、それ以前の、何が危険なのかという評価は、科学委員会の責任でやっていただきたい。
- 葉山：堀越氏の意見に賛成である。地域側では処理できないことが多すぎる。そもそも投げられた自覚もないし、投げられても困る。
管理計画改定作業部会は、3回目でやっと、自分たちの思いを言葉で話すことができた。毎回、膨大な資料を読み上げられて意見を求められるという運営の仕方では、地域側は知恵を出しきれない。
- 渋谷：例えば、この外来種の話は単なる報告なのか、管理機関として何を言いたいかを明確にし、メリハリをつけた方がよい。参加者の知識に差があるので、よく御存じの方が話しても、他の方がわからないということが生じる。
- 柴田：科学委員会との関係や地域連絡会議の位置づけについては議論されてきたのだと思うが、運営方法については十分でない面もありそうなので、体制も含め、管理機関で一度議論をしたいと思う。
- 葉山：資料2-1 P5で“一般村民がイエシロアリ発生地域から母島に苗を持ち込むことは禁止されている前提”とあるが、条例での禁止事項についてはこの1年で頻繁な情報発信があつたくらいで、これまでは、行政から禁止のアナウンスはほとんどなく、農業者は知らなかったという。そもそもイエシロアリ条例は、母島島民が署名活動をして制定されたもので、その中には農業者もいた。農業者はこれまで土付き苗を導入してきたが、これまでは行政から土付き苗の導入禁止のアナウンスは一度もなかったと聞いている。これまで、農業資材については条例による規制対象に含まれていなかったのではないかと、複数の農業者が言っている。最近になってこうした規制を呼び掛けられてきているが、改めてはっきりさせてほしい。母島の農業者は苗を勝手に持ち込んでいると言われ、不本意だと感じている。
- 尼子：即答できないので、次回の地域課題WGで扱わせていただきたいと思う。
- 渋谷：地域課題WGで議論を行う中で重要だと考えているのは、行政機関内での意識の統一である。役場の中でも環境衛生の部門が持つ条例の取り扱いについては、考え方を整理し、次回ご説明したい。
- 森田：アジアベッコウマイマイ対策について、もう少し詳細をうかがいたい。ナメ

クジ駆除剤を用いて対策予定とのことだが、それは他の陸貝に影響を与える可能性もあるのではないか。

- 葉山：陸貝類は全滅すると思う。踏査した限りでは、対象地域にはアフリカマイマイ、ウスカワマイマイ、アジアベッコウマイマイのみしかおらず、カタマイマイ属は海側も踏査したが、古い死殻しか見られなかったので、保全対象種が薬剤で被害を受けることはないと思う。
- 持田（村・教育委員会）：科学委員会で千葉先生から、アジアベッコウマイマイは農業害虫ともなり得るとの助言があつた。そうした情報は地域連絡会議に示していただくべきことだと思うので、私から補足した。

<愛玩動物による新たな外来種の侵入・拡散防止に関する地域課題WG検討状況報告>

○資料2-2に基づき小笠原村・深谷より説明を行った。

○説明を受け、以下のような意見及び質疑応答があつた。

- 堀越：最初のWGでは、母島側の団体が入っていなかった。条例化を見据えた具体的な検討の段階では、母島の方にも入っていただかないと話が進まない。このプログラムは日本で今まで行われたことのない話であり、また住民生活に直接関係する内容なので、是非前に進めていただきたい。
- 深谷：もともと母島観光協会にはご参加いただいていたが、議論が具体的にならなかったこともあり、ご参加いただきやすい内容になった場合に、改めてお声かけしようと思っていた。ご指摘いただいた通り、条例文案をもとに具体的なディスカッションができる段階となったので、今後、改めて経過をご報告し、ご参加のお願いをしたいと思う。母島側の飼い主の会にも、改めてお声掛けをしたい。
- 平賀（母島観光協会）：本WGに2,3回出席したが、疑問が多かった。父島主導で動いている中で母島が打ち捨てられていくように感じ、参加する意味がないと考えた。獣医師の駐在施設も父島主導で動いている。母島は獣医師がいるから、それで動いてほしいと言われ、母島が考えている事を受け止められないようだったので、出席する必要性がないと思った。一度母島に来てきちんとお話をしたいとの申し出もあつたが、それも実現していないと思う。きちんとお話ししたいのに、無視されるようなので、発言を辞めようとなり、そうしたいきさつで、欠席している。今後参加が必要であれば事前に説明にきていただき、我々も出席する意義を理解して会議に臨みたい。
ツヤオズアリの話も、母島から対策の協力を投げかけたと思うが、会議ではペーパーが出されるのみで、依然アリの数は増えているように思う。なぜこうしたことが行われるのか、素人にはよくわからないので、ただ、「検討する」とか「～する予定」ではなく、目的が実現するような具体的な会議にしてほしい。
- 深谷：会議にご出席いただく意義については、改めて説明のお時間をいただきたい。

＜オオコウモリの保全に係る事項＞

○資料2-3に基づき環境省・岸より説明を行った。

○説明を受け、以下のような意見及び質疑応答があった。

- ・ 瀬堀（商工会）：洲崎に餌場を作り、サンカクバナナを植えたが、その後の状況を教えてほしい。
- ・ 岸：洲崎の一面に、サンカクバナナとモモタマナを植え、餌場のモデル地区とした。今後島内に広げていける取組にしたいと思っている。12月初めに東京都に了解いただき、草刈りや肥料あげ、株を増やすなどの作業をした。今後も多くの機関に協力いただきながら、こうした取組を広げていきたいと考えている。
- ・ 瀬堀：東京都によるGPSによるモニタリング調査は継続するのか。
- ・ 中野（小笠原支庁）：GPS調査は6年目となり、今年度は春季調査も行ったことで、年間を通じたデータを得られた。ただし、今年の調査では新たな調査課題も生じたので、今年度と同様の調査が行えるよう、来年度へ向けた予算要求を行っている。予算確定は1月半ば以降である。
- ・ 鈴木：資料2-3に地域の取組がまとめられているが、20年近くに及ぶ経緯がある。議論の前提として補足説明をさせていただき、追って科学委員会も含め年表を発信したい。オガサワラオオコウモリは、国の天然記念物になった後、環境省のレッドデータブックでIA類にカテゴライズされた意義は大きかった。種の保存法による種指定は、かつては少数だったので、当時はレッドデータブックのどのレベルに位置するかが保全を考える根拠になった。平成8年は合計2頭の死亡が確認されているが、絡まり事故は30頭にのぼっており、全ての個体が死亡する可能性もあった。阿部学先生が、絶滅の危険性を国に発信している。また、農園主の息子が環境省長官と文化庁長官に公開質問状を提出した。農園側の過失もあったかもしれないが、国立公園内の農地における絶滅危惧種の事故であり、農家だけの問題ではなく、管理上の問題はなかったのかと問題提起がなされる。今も継続する問題のエッセンスが平成8年のこの事件に象徴されていると思う。この時点で、科学的知見の重要性、農業被害対策の必要性、ネグラ保全の重要性が内地の複数の専門家と交えた議論で結論づけられている。2001年、個体数の減少が確認され、緊急事態であるとの発信がなされた。その後3カ年に渡り、環境省南関東地区事務所職員が来島し、島内で、初めて国を交えた行政機関による会議が催された。ここでは、窓口の一本化、関係機関の横断的連携、具体策と役割分担必要性に関する共通認識がなされた。2001年からは、農業被害防止の器具作りを開始。2002年には、個体数が減少したコウモリに関する緊急提言を雑誌に投稿し、緊急調査、農作物被害対策、人工的な餌資源の確保、ねぐらの保全、ノネコを含む外来種対策、観光利用による攪乱がないための事前コントロールが提言された。同年、観光利用があるということで、オオコウモ

リ自主ルール策定、ナイトツアー業者を中心としたガイド部会の設立が行われた。その後、環境省主催で2回目の保護検討会が行われ、緊急提言と同内容で問題整理がなされ、関係機関の役割分担を図り対策を進める必要性が確認された。また、扇浦分譲地の開拓や浄水場の建設があり、ネグラ保全が不確かなものとなり、コウモリが様々な場所に移動し、移動先で新しい農業被害が起きる等状況が変化していった。浄水場移転に伴い、保全計画、ロードマップがないとどうにもならなくなり、2006年から、iBoが協力して、村が他の行政機関に呼び掛けて、オオコウモリの保全計画作成に向け動き出した。国内希少野生動植物種指定に伴い、村から環境省にバトンタッチされた経緯がある。WGが始まる時点では、外来植物対策のスピードも勘案し調整を図る必要性が提案されている。餌を囲いこんでいる以上、コウモリの餌資源を奪った結果人為的に農業被害を激化している可能性が共有された。全体認識として、この3年、議論は進んだもの、進まないものもあるが、問題の整理は変わっていない。ヒトと共生していける頭数は何頭かという問題が絞り出された段階だが、本来は、行政側から、地域がコウモリとの共存をめざし、課題に対する実行プランを作り役割分担しよう、という話が3年前にあれば、このWGはなかっただろう。今後5年間は、問題の整理をくり返すのではなく、課題をクリアするための具体的な話し合いをしていただきたいと切に願う。

- ・ 柴田：本件は管理機関でひきとり、物事が進むよう努力する。

（3）関係機関の主な事業実施状況

＜奥村地区ネズミー斉防除試行 実施結果概要＞

○資料3-1に基づき小笠原村・深谷より説明を行った。

○説明を受け、以下のような質疑応答があった。

- ・ 瀬堀：有人島のネズミ対策は、今後どのような計画で進めていくか。
- ・ 深谷：村だけではなく、様々な機関の協力により実施しているので、今後の作戦についても、奥村での試行結果を踏まえ今後議論の上決定する。役場の考えでは、餌を改善する余地があると考えており、様々な餌で効果を比較した方がよいとも考えている。また、実施前に誘引期間を設けるなど、技術的改善は図りたい。清瀬・大村・扇浦地区等で同じく実施していきたいが、マンパワーと予算面で各機関の協力が必要である。効率的に実施できるよう、計画検討する必要がある。
- ・ 瀬堀：捕獲された70匹は全てクマネズミか？
- ・ 深谷：すべてクマネズミである。
- ・ 森田：オカヤドカリの混獲数を知りたい。生きていたのか。
- ・ 深谷：手元に数字がないので改めて報告する。天然記念物の死亡個体数は報告されていないので、死亡個体はなかったと認識している。

<兄島陸産貝類保全プロジェクトについて>

- 資料3-1に基づき環境省・岸より説明を行った。
- それに対する意見・質疑はなかった。

<南島の生態系回復に係るネズミ対策>

- 資料3-3に基づき東京都小笠原支庁・中野より説明を行った。
- 説明を受け、以下のような質疑応答があった。

- ・ 瀬堀：南島のネズミと父島のネズミのDNAに類似はなかったとのことだが、父島のどのエリアのネズミのDNAと比較したのか？父島で南島に一番近いところのネズミのDNAで調べないと、跳び移りの有無は言えないだろう。
- ・ 中野：父島南崎である。それで父島からの跳び移りの可能性が低いとわかったので、南島個体群の根絶を目指すことにした。

<植生の保全回復に係るノヤギ対策>

- 資料3-4に基づき東京都小笠原支庁・中野より説明を行った。
- 説明を受け、以下のような質疑応答があった。

- ・ 瀬堀：媒島でノヤギ根絶後に回復した植生の中にはギンネムも含まれるのか？
- ・ 中野：ギンネムも増えている。
- ・ 安井：ノヤギの捕獲方法であるが、全員が一方から攻めるのではなく、二隊に分かれて、一隊が反対側で待ち構えて挟み撃ちにすればどうか。ヤギは夕方や朝に集まる場所がある。長崎にも数頭いる。昼間休んで集まる時刻があるので、そういう場所や時間を選んで効率的に捕獲や銃で撃つてはどうか。
- ・ 中野：銃器によるノヤギ排除作業は早朝から行っているのですが、作業時間に限りはあるが、夕方の方が効果的ならば、作業時間の変更も検討したい。また、有人島での作業は無人島とは異なり、安全確保も特に考慮が必要なため、1日に東側も西側も実施するというわけにはいかない。
- ・ 安井：それほど広いエリアではなく、コペペ岬の西側と東側で挟み撃ちにする等、人が行かないような場所で東西から実施できないか。
- ・ 中野：今後検討したい。
- ・ 瀬堀：イヌを使った追い込み駆除なども導入していかないと無理ではないか。ヤギは集まる習性がある。父島の場合は兄島や弟島とは事情が異なり、森が深いので、今の方法だと根絶は無理ではないか。
- ・ 中野：15年前に鴛島でイヌを使った駆除を試したが、当時はヤギを追える訓練をした犬がいなかったためうまくいかなかった。今後も手法は研究したい。

<兄島アノールCラインの施工>

- 資料3-5に基づき東京都小笠原支庁・中野より説明を行った。
- それに対する意見・質疑はなかった。

<国有林の小笠原諸島固有森林生態系保全・修復事業における今後の実施計画>

- 資料3-6に基づき保全センター・梶井より説明を行った。
- 説明を受け、以下のような質疑応答があった。

- ・ 門脇（母島農協）：薬剤・農薬を扱っている事業者としての疑問だが、駆除のためにどういった薬剤を使用しているか？
- ・ 津田（保全センター）：ラウンドアップ・マックスロードである。
- ・ 門脇：入手経路はどこからか？
- ・ 津田：修復事業は委託事業であり、内地で発注しており、薬剤は事業実施者が購入しているため、こちらではわかりかねる。

(4) その他

・ 西之島に係る経緯と今後の対応について

- 資料4-1に基づき関東地方環境事務所・千田より説明を行った。
- 説明を受け、以下のような質疑応答があった。

- ・ 堀越：小笠原村の議会で決議されたことがあるので、村から報告いただきたい。
- ・ 渋谷：12月に開催された村議会で、「西之島の早急な立ち入り制限と世界遺産区域の拡張を求める意見書」が採択された。基本的には、貴重な場所なので、法律などで立ち入り制限の保護担保を早急に講じてほしいとのことである。具体的には、“国は自然環境保全法に基づく原生自然環境保全地域などの立ち入り制限を含めた適正な保護担保措置を早急に講じるとともに、世界遺産区域を拡張し、世界自然遺産の価値を確実に保全することを強く要望する。”といった内容の意見書が出されており、2月に環境省へ意見書が提出されると聞いている。議会と執行部は車の両輪のようなものである一方、別の立場でもあるので、ここからは個人の意見として聞いていただきたいが、川上先生の講演を聞き、大変興味を持った。保全の大切さも理解しているが、かつてダイビングに行き、ウェットランディングで西之島に上陸したことがあり、また行きたいと思ったのが正直な気持ちである。島民にとっては、行こうと思えば難しくない場所である。今後、保全に向けて動いていくのだろうし、上陸ルールの制定も理解できるが、利用の部分をどうするのかは、十分議論をした上で結論を出してほしい。保全の側面だけの議論で終わってほしくない。マスコミを通して国民に西之島を知っていただくということも意義があることであろう。立ち入り制限地区となれば、研究目的以外では上陸できないという判断にしかならないと思う。それでよいのかは、地域の人の意見も聞きながら進めてほしい。
- ・ 金子（観光協会）：私見だが、観光事業者としても保全することに異議はない。た

だし、西之島の価値を地域住民に十分理解いただかないと、兄島のようにブラックボックスが増え、独りよがりの保全になってしまうのは悲しい。西之島の価値がいかに高いかを、地域住民が共有する必要がある。

- ・ 千田：どういう保全がベストか、地域と共に考えていきたい。普及啓発の面では、世界遺産センターの展示等でも、関連する情報を提示していきたい。兄島や他の島についても同様、遺産地域を身近に感じてもらえるような工夫をしたいと思う。

<世界遺産センターの運営について>

- 資料4-2に基づき環境省・尼子より説明を行った。
- 説明を受け、以下のような質疑応答があった。

- ・ 森田：遺産センターで、漁業関係の価値を高める取組・展示予定は全くないか。
- ・ 尼子：今、展示物の詳細を決めているが、遺産価値として認められた生態系、具体的には植物・陸産貝類を中心としたパネル構成となっている。海に関しては、海鳥に関する展示はあるが、漁業そのものの展示は考えていない。柔軟に張り替えができる構造なので、よい情報があつたら検討したい。
- ・ 葉山：かつて話があった母島の世界遺産センターについて、行政側はどのようにお考えか。
- ・ 津田：数年前に我々が計画し、入札不調に終わった。その後具体的に動き出してはいない。今のところ、いつまでにという構想にはなっていない。
- ・ 葉山：よろしくご検討いただきたい。
- ・ 堀越：地域連絡会議としては、母島に世界遺産センターが欲しいという要望があるということである。
- ・ 平賀：愛玩動物の会議でも母島の施設にして質問をしたが、今は難しいとの回答で終わってしまった。母島には陸貝が残っており、守らねばならないという共通認識ができていると思う。こうした状況をふまえても、やはりこちらに施設がなく担当官もいないのはおかしい。

本日は事務局の皆様が母島にいらしていただいて会議を開催いただき、我々は初めて、会議に主体的に参加したという自覚をもった。今まではどの会議もかやの外という感じであった。今日は、来ていただき嬉しかった。今後も、会議は母島主体で会議を進めていただきたい。

葉山さんがツヤオズアリの問題に前々から取り組んでくださっているが、依然増えているという状況を知り愕然とした。母島の陸産貝類が重要だというならば、一団体に任せておくのではなく、父島・母島全体で、科学委員会の方のお知恵も拝借しながら、全員参加で協力していかねば守れないと思う。その点、父島の皆様にも共通認識をもっていただきたい。

- ・ 堀越：地域連絡会議の開催回数は通例、年2回である。父島、母島で1回ずつ開催してほしい。

<遺産登録5周年記念行事の実施状況について>

- 資料4-3に基づき小笠原村・深谷より説明を行った。
- 説明を受け、以下のような質疑応答があった。

- ・ 堀越：普及啓発の取組に関しては、ギレスピー先生がいらした際に、行政やコンサルが発表するのではなく、現地で生態系保全事業に携わる様々な方が参加して発表を行ったことはよかったのではないか。
- ・ 深谷：普段、行政との関わりが少ない人にも発表いただいたことは、島内の人々の交流も深まり、参加者のモチベーション向上にも貢献でき、よい取組だったと思う。
- ・ 堀越：科学的な評価ではないが、これは地域連絡会議として評価したい話である。地域連絡会議で評価できる話と分けて、時間の使い方を考えてはどうか。

- ・ 柴田：その他全体を通じて、御意見があればお願いしたい。
- ・ 鈴木：科学委員会でも言われていたことだが、管理計画の運用体制を見直しの対象としてほしい。管理計画・アクションプランに描かれていても、絵にかいた餅になっていることが多い。運用面で課題があつたり、組織の人が足りなかったり、体制に不備があるので見直しが必要である。例えば、インターネットで外来種が購入できる時代になったが、何をどこに持ち込んではいけないのか、外国に寄港した船が直接入ってくるようになったという問題や、ペットが逃げた時の対処等も、議論の受け皿がない。世界遺産の価値保全に関係のあるはずの話であるのに、どこに持ち込んでよいかわからないトピックが散見されている。これらを運営上の問題として受けとめ、整理することも、管理計画改定にあたり検討いただきたい。
- ・ 森田：父島の世界遺産センターには土付き苗の温浴装置は置かれるのだろうか。もしくは、内地からは乗ってこない想定で、配備はされないのか。
- ・ 尼子：購入・配備することは可能だが、運用体制が整理できていないので、今後議論したい。母島については、集出荷場に機械が置いてある。今後集出荷場が建て替えられるそうだが、引き続き置かせていただければと思っている。

- ・ 大河内委員：科学委員会を代表して感想を申し上げる。さいたまの会場で見ているのとはちがい、現地に来て実感できたことが多い。私もおかねてより母島の陸産貝類を心配していたが、母島への外来種侵入防止策については、入らないようにとの提言はできるが、どうやって、という点に関しては科学委員会で言えることには限界がある。科学者、地域それぞれの役割があるので、連携して同じ目的に向かって、

今後も協力していきたい。

- ・ 柴田：過去の会議の積み残しとなっている内容も多いような印象を持った。各課題に対しては、それぞれ個別のWGや部会で検討されるべきものも、管理機関の中での検討・調整が必要なものもある。時間の制約ある中で、本日いただいた皆様のご意見を受け、最大限の対応していくこととしたい。

○東京都・松下支庁長より閉会の挨拶

本日の反省点を述べると、まず、タイムキーピングがなされていない。議事次第を見て、これを全て扱わねばならないのか、絞れないのかと思っていた。報告なのか、情報共有なのか、意見交換なのか、評価すべきなのか、2時間の使い方を考えねばならないと思う。参加者の皆様の時間を拘束してやみくもに会議を開催するのはどうなのかと思う。シンプルにわかりやすくやらねばならない。資料も多すぎて紙の無駄である。時間制限をして行うべきである。また、議論をするならば、いただいたご意見にきちんと答える場でなければならない。なし崩し的にやってしまうと、後味の悪さだけが残る。各種対策は、スケジュール感を意識して実施すべきである。柔軟にその都度対応していく、というのでは結局何も進まない。また、コストの話がなされていないことが気になった。世界遺産を守るためだからといって無尽蔵に資金を投入するわけにはいかない。対策コストを明らかにした上で、論点を絞って議論すべきである。以上の点は、次回以降、自分も含め改善すべきだと思う。

以上